を使うための新しい力をつけてきたことの表れでもあるのです。

アメリカの子どもたちは、学校の外にはほとんど日本語の環境がないわけですから、日本に住んでいる子どもたちのようなスピードで日本語の力を伸ばしていくことはできません。しかし、気持ちを表現したりするためには英語という言葉を持っているわけですから、日本語の習得をあせる必要はありません。小学校中学年ぐらいの時期は、新しい言葉をどんどん吸収していく時期でもあります。アメリカで生まれ育った子どもたちの場合は、英語でたくさんの言葉を知っているので、「chocolateは、日本語では何と言うんだろう。」「cokeは、日本語では？」というふうにして、日本語の学習も進めていくことができます。第一言語の力が、第二言語の習得のための力となるのです。この時期になると、日本語で言った内容を英語で言い直したり、英語で言えることを日本語でどう言うかを考えたりする「翻訳」のような作業もできるようになってきます。これは、低学年の子どもたちには難しいことです。

この時期に言語環境の違うところに移る子どもたちには特に注意が必要です。例えば、日本からアメリカへ移った場合、英語の言葉を聞いたり見たりしても、理解できないので、それを自分の言葉として身につけることができません。一方、日本語の環境はなくなってしまうので、日本語の語彙を増やしたり、新しい言い方を覚えたりするチャンスも失ってしまうことになります。小さい子とちがって、家庭の中での普通のやりとりでは、言語の力を伸ばすのには十分ではありません。

そうなると、うっかりしていると、英語でも日本語でもほとんど学習することがないままに数年間を過ごしてしまうことも起こり得ます。そうなってしまうと、５年生なり６年生なりになったときに、年齢相当の内容を理解したり、表現したりできる言語がないという状態になってしまいます。もしも英語ができれば、日本語の表現がよく理解できない場合、説明を受けたり調べたりして英語で言いかえることができたとき、「分かった」という認識を持ち、それによって日本語の力も伸ばすことができます。ところが、どちらもできないとなると、低いレベルの内容をなんとか積み重ねて高いレベルの内容を理解させなければならないということになるのでたいへんです。啓明学園に来る子どもたちを見ても、日本語が全くできなくても、英語でしっかり勉強ができていた子の方が、ずっと指導しやすいのです。

このような不幸な状態におちいることを避けるためには、どの言葉を使ってでもいいから、新しいことを学習できる状態を維持することが必要です。日本からアメリカへ移った場合なら、英語で学習ができるようになるまでは、日本語を使って新しい内容を

理科の時間にチョウの観察

学んでいくのが一番賢い方法であるのは言うまでもありません。アメリカの学校にそれを期待するわけにいきませんから、家庭でどれだけできるかが鍵になります。ただし、子どもの生活の中心は、現在通っている学校にあるのですから、日本語を使わせることが、英語の世界へ入っていく妨げにならないように配慮する必要があります。学校で英語で習ったことを家の人と日本語で復習することは、一石二鳥の効果があると言えるでしょう。補習校に通うことは、日本語で年齢にあったレベルの知的な刺激を受け続けるという点でも大きな意味があります。「早く英語に慣れさせるために」日本語から全く遠ざけてしまうことは、英語を習得するためにも、気持ちの安定を維持するためにも賢明とは言えません。

年齢があがるにつれて、生活の中で必要なコミュニケーションの中身が複雑になってきます。イマージョン・プログラムの子どもたちの日本語は、少しずつ上達してはいきますが、社会も学校全体も日本語の環境にはないので、限られた時間と機会の中では、上達のスピードは子どもたちの精神的な発達に追い付いていきません。そこで、日本語だけで学校生活をしていくことはだんだん難しくなってきます。この困難を乗り越えるためには、指導する大人の側が、いろいろな雑念を捨てて、子育ての基本に立ち返らなければなりません。

編集長から一言

佐々先生ご自身の、アメリカのイマージョン・クラスで指導されたご経験からのご意見です。

言葉自体は道具です。その言葉を用いて、どのような内容を、どのようなレベルで伝えられるのか。また、その言葉を使って、どのような抽象的な考え方を身に付けていくかが、本当に必要なことなのです。特に、知的発達の著しい中学生にとっては、深刻な課題です。

2-way bilingualの方法としての、イマージョン教育は、メリットだではなく、時として大きなディメリットも含んでいます。